

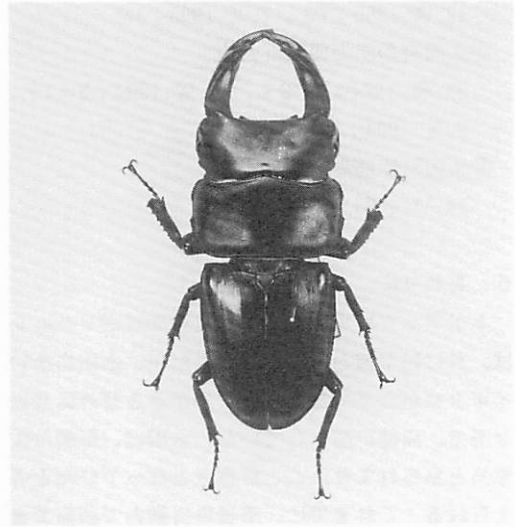
オオクワガタをめぐりて*

高橋 寿郎

オオクワガタは従来 *Dorcus hopei* (E.Saunders, 1854) の学名で知られてきた。この学名は茶の産地調査のため中国大陸を旅行した Fortune (敬称略, 以下同じ) の採集になる標本によって E.Saunders が1854年 *Platyprosopus* 属の種として記載された(原産地, 上海 [Shanghai])。

日本からこの種を記録したのは神戸にいた貿易商 T.Lenz の採集品について E.v.Harold が書いた論文の中に出てくる(1875)。続いて G.Lewis は1883年初めて日本での本種の産地を次のように具体的に記録した。即ち, Kobé, Kioto and Sendai. そのとき, C.Waterhouse が1874年記録した *Dorcus binodulosus* Waterhouse は発達の悪い小さな本種(*D. hopei*)のみであるとしてある(こちらの記載では, G.Lewis の採集とあるが産地は Japan とだけになっている)。現在この *binodulosus* が日本産オオクワガタの亜種名になる(このことは後述)。

即ち, オオクワガタの学名をつけた記録としては, 日本では神戸産が初めての記録地になるかと思う。ところが日本では, オオクワガタをもっと前に図説されたものがある。それは名古屋の本草学者, 水谷豊文による「豊文虫譜」の中で♂が示されているのである。この図は, 小西正泰がカラーで示されている(1990)。水谷豊文は, 「豊文虫譜」1冊, 「水谷虫譜」6冊, 「虫多寫真」1冊があり, このオオクワガタは「豊文虫譜」に出ていると(杉浦明平もカラーで図説, 1994)。この虫譜の出来たのが何時なのかははっきりと示したものが無い。水谷豊文は1779-1833年の間にいた人であるから恐らく1800年代の始めの頃のものではないかと考えられる。多分, 名古屋附近産のもので



Dorcus curvidens binodulosus Waterhouse, 1874 オオクワガタ
川西市笹部 1♂, 7.IX.1961, 体長54mm T.Takahashi leg.,
(現在, 人と自然の博物館に保管)

図を作ったのかと思う。

ずいぶん古いですが, その頃オオクワガタがわりと人の目につくほどいたとも考えられる(荒俣 宏もこの豊文虫譜については「天保のころ」と製作年をされているだけである-1991-。杉浦明平によれば水谷豊文の著作は公刊されたものは「物品識名」一種だけで他は未刊原稿または写しのままであるとしてオオクワガタも図示されているが「水谷豊文虫多寫真」よりとある(1986)。したがって製作年号などは依然はっきりしないし, どれに出ているかもよくわからないが, 天保4年55才で没したとあるから天保の頃にかかれたものでよいのかもしれない)。

オオクワガタが神戸, 京都, 仙台から記録されて以後, 松村松年博士が北海道から記録をされた(1894)。日本人による学名をつけたオオクワガタ

*兵庫県甲虫相資料・316

の記録としてはこれが一番初めてのように思われる。ただこの記録は、産地とかデータが全くない単に学名と和名を羅列しただけのもので、あまり確実な記録のようにも思われない(*Dorcus Hopei* Saund. クワガタムシとある)が、この報文以後本種の北海道分布については他に確実な記録が見られないまま、多くの文献に分布地に北海道を挙げて今日までにいたった(但し、北海道に本種を産するとした記録は1991, 1993年になってやっと出てきた)。

その次に古い記録は、大上宇一の兵庫県揖保郡(1901)、中村正雄の新潟県刈羽郡「北條」(1925)と出てくる。図説では、松村松年博士(1905)、鈴木元次郎(1923)が発表になった。オオクワガタはそれほど少ない種ではなかったのか、それとも人目にあまりつかない虫であったのか、人々の関心がなかったのか戦前での文献で見た限りでは意外と関係文献が少ないように思われる。ただ戦前において記録の見られた府県は次のようである。

青森県(十和田湖周辺)、宮城県(仙台)、新潟県(刈羽郡、新発田)、茨城県、東京都(用賀、杉並、井之頭、目黒)、三重県、京都府(丹波大江山)、大阪府(箕面、池田、八谷)、兵庫県(川西市、笹部、神戸市、多井畑、舞子、揖保郡)、四国伊豫、瓶ヶ森(高知県)、九州にも記録があるようだが筆者は文献で見られなかった。

筆者の目を通した文献が少ないからかも知れないが、日本各地に分布しているクワガタだと思いつながら、その記録がこんなに見られないのも意外であった。京阪神地方では愛好者の間でこの虫は注目されていたのではないかと、またこの虫の採集に出掛けることが多かったのではと思われる点がある。それは、当時筆者は昆虫趣味の会神戸支部に入会(1938年)、支部長関 公一、幹事米谷正司の所へよくお邪魔したものである。その頃米谷正司は標本商のようなこともやっており、標本ニュースのようなものを発行していた。標本箱3箱位

にギッシリとオオクワガタの標本を並べ、自慢気に見せられたりした(この標本箱は米谷正司が設計しこしらえたもので、5.8×31.5×46cmの大きさのもので、筆者は現在でも20箱を箆筒に入れている)。この標本の産地は、主に笹部、能勢のものであったと記憶している(昆虫界 Vol.7, No.59, 1939 の表紙に「図鑑と標本」と題して米谷正司撮影の写真が使用されている。そこに米谷正司所有のオオクワガタも写されている)。

ところで、神戸で日本での初記録が出ているのであるが、当時の神戸はかなり未開発の地であり、港町であって背後の山地帯は野猿とか鹿がいる状況であったと考えられるので、そこにオオクワガタがいたといっても別に驚くにあたらないだろうと考える。実際に戦前1930年代には神戸市内でオオクワガタの採集記録はあるし、筆者自身も裏山で採集した経験もある。数は少ないにしても神戸背山にオオクワガタはいた。それから何度かの洪水、戦争中の燃料不足のため樹木の伐採とか、そして戦後の無秩序の開発の波で少なくとも戦前を知っているものには驚くべき変化によって、まず神戸市内での本種の生棲は絶望的であると考えられる(1930年代は東京都内でも採集が出来たようだし、現に井之頭で採集された立派な♂がカラーで当時の図鑑に図示されたりした)。笹部附近とか能勢の方も戦後暫くはよかったが、この附近も急速な開発の波に洗われて生棲環境が次々と破壊されている。さらにはクワガタブームとやらで、乱獲(商売になる、金になるとなると想像を超えた捕獲のしかたをやったりしている)でその姿を急速に減少そして絶滅へと進んでいるような感じを受ける。

それでも戦前はそれほど注目されるクワガタムシでもなかったのか文献上に出てくる記録は少なかった。戦後も暫くの間はそんなに話題になるようなこともなかったと思われるが、1980年代に何が原因かよくわからないのであるが、クワガタブ

ームが起こるようになってからあれよあれよという間にクワガタムシ就中オオクワガタは日本を代表するクワガタの王様になってしまったのか、大変な人気者になってしまった。オオクワガタについての文献も数多く出版され始め、特に子供向けの図説等は同じようなものが次から次へと出版され、そのものズバリ"オオクワガタ"というタイトルの本の出現にまでいたっている。最近では、飼育によって大きな個体をこしらえるということに熱中するとか、財産造りに一役買うとか、いやはや大変な状況になっている。

何がこんなにブームになったのかわからないし、これからもどうなってゆくのか想像も出来ない。

ただ、オオクワガタはほぼ日本全国に分布しており、個体数は少なくお目にかかることはかなり困難なクワガタムシではあるが、金儲けとか興味本位での乱獲は厳に止めてほしく、そうでなくても自然破壊の中で次第に絶滅に追い打ちをかけられているクワガタムシのように思われる(最近はおオクワガタの体長の大きなものを飼育によって作ろうといったことが盛んになっているようで、東南アジア産の近似種との交配による生産が行われ、混乱しているとのことも聞いている)。

さて、最後になったがおオクワガタの学名について若干述べておく。初めに記したごとく従来からオオクワガタは *Dorcus hopei* (B.Saunders, 1854) が用いられてきた。市川敏之は種々検討の上、日本から中国、東南アジアにかけて広く分布している *Dorcus curvidens* (Hope, 1840) の亜種 *hopei* (B.Saunders, 1854) を用いるべきことを提唱された(1986)。最近、水沼哲郎・永井信二著になる"世界のクワガタムシ大図鑑"(1994)の中で中国に産する *hopei* (Saunders) と日本、朝鮮半島に分布する個体群は違うとして Waterhouse が 1874年に与えた *D. binodulosus* を日本産オオクワガタ *Dorcus curvidens binodulosus* Waterhouse, 1874の新しい亜種名として示された(この項水沼

哲郎担当。水沼哲郎は亜種名を間違っている。

Water-house の記載名は *Dorcus binodulosus* であり *Dorcus binodulus* ではない)。

<参考文献>

- 荒俣 宏(1991) 世界大博物図鑑①「蟲類」
(平凡社・東京)
- Harold,H.V.(1875) Verzeichniss der von Herrn, T.Lenz in Japan gesammelten Coleoptera Abhandl. Nat. Ver. Bremen. V:115-135.
- 市川敏之(1986) オオクワガタについて
月刊むし(185):4-12.
- 小西正泰(1990) 虫づくし・虫の博物画 虫の日本史:8-27(新人物往来社・東京)
- Lewis,G.(1883) On the Lucanidae of Japan
Trans. ent. Soc. London, 1883 :333-341.
- 松村松年(1894) 北海道産鞘翅類
動物学雑誌 6(65):84-97.
- 松村松年(1906) 日本千虫図解 第3巻
(警醒社・東京)
- 水沼哲郎・永井信二(1994) 世界のクワガタムシ
大図鑑 p.265-266, pl.94,95, fig.394,
1-37(むし社・東京)
- 大上宇一(1901) 播磨産金亀子科
動物学雑誌 13(156):321-323.
- 杉浦明平(1986) 水谷豊文「江戸の博物図鑑12」
アニマ(159):64-67.
- 鈴木元次郎(1923) 日本産鍬形虫
通俗昆虫雑誌 1(1):5-16, pl.1,2.
- Waterhouse,C.O.(1874) Description of five
new Lucanid Coleoptera
Ent. Monthl. Mag., XI:6-8.
- (TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町1-44)